

2015.2.21

生誕150年 “北欧の巨人 シベリウス” 第1回

プログラム

今年は北欧フィンランドが生んだ大作曲家、シベリウスの生誕150年に当たります。様々な作品を聴きながら謎に満ちた生涯をたどります。今日はその第1回目をお送りします。

外科医だった父を2歳の時に亡くしたシベリウスは、最初ヴァイオリニストを志し、ヴァイオリンを習い始めます。しかし人前であがりやすい性格を知り、演奏家の道を諦め、作曲への興味を募らせて行ったと言われます。ドイツ・ロマン派、ロシア国民楽派の影響を受けながらも、次第に独自の作風を築き上げて行きました。青年時代に高まっていた祖国愛を激しく燃やしていたシベリウスが民族的と呼ばれるのは当然ですが、古くからの民謡を取り入れるのはその方法の一つとして知られています。しかしシベリウスの場合は生の素材をそのまま使うのではなく、祖国の精神を発想のひとつとして旋律やオーケストレーションを引き出して行ったのです。その後作風は、ロマン的色彩から次第に内省化して行き、独自の境地を切り開いて行きますが、91歳と長生きしながらも1929年以降、27年間創作活動は途絶え、それは“謎の空白”として音楽史に刻まれることになります。

「クオレマ」は、義兄ヤーネフェルトの戯曲のために作曲された劇音楽ですが、今日は後に演奏会用として抜粋編曲された4曲をお聴きいただきます。瀕死の母が幻覚に見た客と踊る場面で演奏される「悲しきワルツ」は特に有名で、しばしば独立して演奏される名曲です。ヴァイオリン協奏曲は唯一の協奏曲ですが、ヴァイオリニストを志した作曲者らしく、華やかな演奏効果と高度な演奏技法を駆使した古今のヴァイオリン協奏曲の中でも屈指の傑作です。「春の歌」は29歳の時に書かれ、3部形式の短い作品ながら、甘美な味わいが捨て難い佳曲。シベリウスは100以上に及ぶピアノ曲を残していますが、その殆どが小品で、今日では演奏される機会にも恵まれていません。ロマンス変ニ長調は最もよく知られたピアノ作品です。交響曲第1番は34歳の時の作品で、チャイコフスキーの影響を受けていると言われてはいますが、既にシベリウス独自の個性が随所に見られ、幻想的に秘めた情熱を持った名曲です。今日はシベリウス・ワールドの幕開けです。

ジャン・シベリウス (1865.12.8~1957.9.20): 劇音楽 “クオレマ (死)”

1. ロマンティックなワルツ op.62b
2. 鶴のいる風景 op.44-2
3. カンツォネッタ op.62a
4. 悲しきワルツ op.44-1

ネーメ・ヤルヴィ指揮日本フィルハーモニー交響楽団
(2001.6.29 サントリーホールでのLive)

ヴァイオリン協奏曲ニ短調op.47

イツァーク・パールマン (ヴァイオリン)
ローレンス・フォスター指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1979.2.1 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

*** 休憩 ***

ジャン・シベリウス (1865.12.8~1957.9.20): 交響詩 “春の歌” op.16

チャールズ・グローヴス指揮ロイヤル・リヴァプール・フィルハーモニー管弦楽団
(1975.7録音 EMI盤)

ロマンス変ニ長調 (10の小品op.24 第9曲)

シユーラ・チエルカスキー (ピアノ)
(1992.2.21 サントリーホールでのLive)

交響曲第1番ホ短調op.39

ディーン・ディクソン指揮フランクフルト放送交響楽団
(1973.2.22 ヘッセン放送協会大ホールでのLive)